

## メディア文化論⑩「集合知」と「集合痴」

水野 博 介\*

### <目 次>

- 1 はじめに
- 2 「集合知 (collective intelligence)」  
に関する議論
  - ① 「三人寄れば文殊の知恵」
  - ② インターネット上のコラボレーション
  - ③ 他人の知識や経験に学ぶ
  - ④ クチコミ情報
  - ⑤ ビッグデータの活用
- 3 「集合痴 (collective idiot or fool)」  
に関する議論
  - ① 初期におけるネットへの否定的見解
  - ② 「炎上」現象等
  - ③ 中川によるネット・ユーザーの全否定
- 4 ネットワークの集会的側面
- 5 結語

### 1 はじめに

インターネットの普及に伴うネット上の交流拡大の結果として、しばしば「集合知 (collective intelligence)」の出現について語られてきた。このことは、これまで民主主義政治のマイナス面として語られてきた「衆愚政治」の場合のような、言ってみれば「集合痴 (collective idiot or fool)」とは正反対の見方であり、大衆に対する信頼の表明である。これら2つの対立する見方

についての理論や証拠について、ここではいくつかの議論を参照し、その相互の関係を考察したいと思う。この議論は、遡れば、古代ギリシャの政治哲学ともつながるものであり、簡単なテーマではない。従って、本稿はスケッチ的なものでしかない。

なお、後者の「集合痴」という言葉は、当初、本稿の筆者（水野）の造語として提示しようとしたのだが、すでに中川淳一郎が2010年の著書のなかで用いており、筆者（水野）もその本を2年前に読んでいるので、その本でその語が用いられていたことは全く忘れていたのであるが、本稿の筆者が無意識にその語を記憶していた可能性はある。ただし、英語の表記は本稿の筆者が考えたものであるし、ここでの議論の仕方は、自身の経験からネット上の人びとの「知」を信じない中川と同じではなく、より広い視野から「集合知」と「集合痴」のあり方をさぐり、整理しようとするものである。

### 2 「集合知 (collective intelligence)」 に関する議論

#### ① 「三人寄れば文殊の知恵」

ネットのフリー多機能辞典『ウィクショナリー日本語版 (Wiktionary)』によれば、「特別に頭の良い者でなくても三人集まって相談すれば何か良い知恵が浮かぶものだ、という意味」とあり、次のような坂口安吾からの引用がなされている。「推理小説ぐらい、合作に適したものはないのである。なぜなら、根がパズルであるか

\* みずの・ひろすけ  
埼玉大学教養学部教授、メディア論

ら、三人よれば文殊の智恵という奴で、一人だと視角が限定されるのを、合作では、それが防げる。(坂口安吾『探偵小説とは』)

この諺について、社会心理学者で東北大学教授の大淵憲一によれば、「社会心理的には大いに疑問です。もちろん、情報を集めて分析するには人数が多い方が有利でしょう。しかし決定は別です」(情報サイト『まなびのめ』2011. 7. 5)とする。なぜなら「合議制による決定は個人の決定に質で劣るだけでなく、責任の所在という点でも問題が大きい」(同)からである。

この大淵の意見についてであるが、確かに、何かを決める場合には「多数決」で決めることが多い。例えば、いくつかの問題のなかから、優先的に取り組むべき問題の順位を決めるような場合は、功利主義的な「最大多数の最大幸福」という立場からすれば、問題はないと思える。

問題があるのは、いくつかの対象の価値をそれぞれ評価し、そのなかから一つのを“特別”なものとして選び出す場合だと思う。そのようなとき、往々にして人びとの評価が分かれる状況があるが、その場合に単純多数決で決めると、結局、問題が少なく無難で平均的なものが選び出されることがある。これは、評価を行う人びと自身の多くが凡庸であって、選択対象の真価を見抜くことができない(通例、とても優れた選択肢は一つあるかないかであろう)場合とも言えよう。そのような真価を見抜くのは、ある特定の人間の洞察力に依存すべき場合がある。歴史的にも、古代ローマのように、元老院の合議を中心とする共和制から、寡頭制や独裁的な帝政に移行したのは、同じような考えによるのだろう。

具体的に、音楽や俳優あるいは美少女についてのコンテストや就職面接における審査側が集団であるような場合である。複数の審査員がいても、その人びとに洞察力が欠けているような

場合には、合議制で選ばれた者は、意見の食い違いを妥協や無難さでもって調整するため、選ばれた者は特に秀でたところもないような平均的な者になることがある。多くのコンテストや賞などの受賞者が、その後、大いに活躍する場合もあれば、そうでない場合もあるが、実際には、後者の方が多い印象がある。特に、グランプリをとった人がたいして活躍せず、審査員特別賞などの、総合評価でない何らかの側面で点数が高かった人が活躍することも稀ではない。似たようなこととして、プロ野球のドラフト(新人選手選択)で高い評価を得た選手が必ずしも活躍せず、低い評価を得た選手の方が活躍するという、よく知られた例もある。

コンテストや賞の審査で、洞察力のある優れた評価者が一人で判断するというやり方をとることは少ないと思うが、比較的最近制定された文学作品の「大江健三郎賞」やある種のオーディションなどは、そのようなやり方をとっているとされる。逆に、合議制の故に受賞者を決めることができなかつた悪い例としては、ある期間の「芥川賞」選考がある。たかが「新人賞」の選考であるから、ある程度期待が持てる作家に賞を出すべきだと思えるが、権威を特別に意識したかのような選考委員たちの消極的な選考のやり方から、例えば村上春樹は2度候補になり、二度目に候補になった際には大江健三郎が高く評価していたにもかかわらず、授賞が見送られ、結局村上は受賞できなかった(市川2010)。

このようなことはクラシック音楽の領域でも同様らしく、「よく、演奏にしる作曲にしる、コンクールでは本当の才能は見出せないと言われますが、[名曲『ボレロ』で有名なフランスの作曲家モーリス・ラヴェルはその典型例でした」(クラシックジャーナル編集部編2011年、171頁)という。

以上のような諸事例を鑑みても、「三人寄れば

文殊の知恵」があてはまる例は限定的かもしれない。ブレイン・ストーミングのようにアイデアを出し合うというような場合は、互いに刺激しあい、確かに良いアイデアが生まれそうであるが、何かを評価したり決定する場合には、経験的に、必ずしも集団合議が優れているとは言えない。評価者はどんな人でもよいわけではなく、評価者自身の能力自体が問われるわけであるが、その点が難しい。洞察力のある人、判断力のある人は確かに存在するが、誰がそのような力の持ち主かを見定めるのは容易ではない。民主的な手続きで選ばれる日本の政治リーダーはしばしば凡庸であるが、これもリーダーになってみなければわからないところが多く、大衆の人気などで選んでも失敗する。

## ②インターネット上のコラボレーション

特定の分野において能力の高い人びとが、インターネット上のある種の作業において協力しあい、例えば、何らかのコンピュータ・プログラムをより良いものに改良するための「オープンソース化」などで、すでに良い成果が上がっている。このような集団作業は、①で引用した作家の坂口安吾の言う、推理小説の作品づくりに通じるものがある。つまり、何か新しい趣向・アイデアを得たり、どこかにバグを見つけたりするには、複数の人間の目があった方が好都合である。

インターネット上のコラボレーションとして有名なのは、「ウィキペディア」である。これは、もともとは、紙の百科事典と同様にウェブ上においても、専門家の執筆による権威ある百科事典を作成しようとしたわけであるが、手続きにあまりに手間や時間がかかり過ぎ、インターネットの長所を生かすところもなかった。それをウォード・カニンガムという人が、「ハイパーカ

ード実験のインターネット版の開発を」行い、Perlというコンピュータ言語を用いて、「たった数百行のPerlコードで、ブラウザ中のページをユーザーが簡単に編集できるサイトを作成する」(リー2009年, 121頁)ということを行った。

問題は、それを百科事典づくりに応用するという点であった。しかし、「ユーザーが編集できるサイト」というと、一見危険に思えるが、管理さえ行き届いていれば、そのページ自体が破壊されることはあっても、コンピュータ・システムに恒久的なダメージが生じることはない」(同)という寛容な考え方で、オープン・ソースに関する「リナックス」の成功例に後押しされて、「ウィキペディア」が実現したのである。

なお、この名称をつけたカニンガムによれば、『ウィキ』とは、ハワイ語で「速い」という意味」(リー同書, 122頁)だそうだが、「彼は、ウィキ・ページのテキストをなるべく簡単に編集できるように」(リー同書, 123頁)、いろいろな工夫をしており、このようなこともインターネットが本来依拠していた、「権威」より「迅速さ」により高い価値をもたせる思想と親和的であろう。

いずれにせよ、適切な管理のもとで、ある程度以上の能力のある人びとが協力しあえば、ある種の「創造」ないし「改良」は可能であろう。

## ③他人の知識や経験に学ぶ

最近の日本のインターネットでは、顔も知らない匿名の他人に何か教を乞うということが広く行われている。誰かが、自分の抱く「問題」のあるサイトに投稿し、その問題に対して、何人もの人が「回答」を寄せ、そのなかから「ベストアンサー」が選ばれる。多くの人びとが関心を寄せ、善意によって答えてくれ、そのなかの優れた回答によって、問題が解決するのであ

るから、これも、一種の「集合知」の形を成している。ただし、問題を投げかけた人は、そもそも「正解」を知らないのであるから、その人自身が「ベストアンサー」を選ぶとすれば、そもそも基準がないのでおかしい。

例えば、ヤフーJapanの「ヤフー知恵袋」というサイトがある。身近な人には自分の無知をさらけ出すようで尋ねにくいような、いろいろな質問を率直に尋ねている。実際に、本稿の筆者がいくつかの問題と回答ないしベストアンサーを読んだ経験では、ベストアンサーに値しないような解答がベストに選ばれていることがあった（ここでは、当然のことながら、本稿の筆者自身はその「正解」を知っていることを前提に述べている）。

このようなサイトを“悪用”したのが、2011（平成23）年2月の京都大学での入学試験の際、ある受験生が試験場からリアルタイムに「ヤフー知恵袋」に入試問題を投稿し、その答えを得て答案を書いたことが後で明らかになり、世間の話題になった事件である。その場合にも、いくつか投稿した問題に対して、複数の人が解答を寄せたが、そのなかには「誤答」もあり、その受験生がそれを採用してしまった場合があったという。なお、この事件に関しては、「京都府警は同3月、当時19歳だった男子予備校生を偽計業務妨害容疑で逮捕、送致を受けた山形家裁は同7月、不処分とした」（『朝日新聞』2012年2月25日〔土〕39面社会欄）という。

ただ、人生の悩みのような、もともと「正解」が存在しないような問題の場合は、“主観的”に納得のいく「ベストアンサー」を選べばよいし、多くの人びとの多様な回答が寄せられること自体が役立つこともあるかもしれない。

#### ④クチコミ情報

「クチコミ」は、今やインターネットには欠かせない情報内容になっている。例えば、旅行の計画を決める際に、宿泊するホテルや旅館の評判をネットでチェックし、クチコミで評価が高かったり、問題の少ないところに決めたりする。

より積極的に、クチコミのデータを活用して売り上げを伸ばしている会社に「クックパッド」がある（稲田2012、7頁）。これは、プロの料理人が作った料理のサイトではなく、ネットのユーザー（多くは素人）が投稿した料理レシピを集積した同名のサイトを運営し、（2012年現在で）過去3年にわたって毎年の年間の売り上げが数十億円あり、「約50%という極端に高い売上高営業利益率を確保し続けた会社」とされている（稲田同書、7頁）。

上の事例を紹介している稲田は、「集合知の活用」に関しては、＜中略＞クックパッドが、我が国での成功例のひとつです。レシピに関する集合知の形成に成功し、集積したレシピの魅力により利用者を集め、さらにサイトへのアクセス履歴や各レシピへのアクセス数、コメントと言った情報をマーケティングなどに上手に活用して急成長を遂げ、現在では東証一部上場企業となっています」（同書26頁）としている。

これは、基本的に正解はなく、経験の集積としての「集合知」と言えよう。

#### ⑤ビッグデータの活用

これは、「集合知」というよりは、ただ単に大衆の行動データの解析を通じて、大衆自身が意識していないような、属性と行動との関係などのパターンを析出する点がミソであり、厳密には「集合知」にはなっていないであろう。“集合”しているのは「データ」にすぎず、コンピュータのユーザー側は、自らのデータを勝手に使わ

れる受動的な存在でしかない（森2012年）。

### 3 「集合痴 (collective idiot or fool)」 に関する議論

#### ①初期におけるネットへの否定的見解

インターネットは、その初期においては、さまざまな可能性や理想のわりに、ソフトウェアの未発達なため、たいした使われ方ができなかった。そのため、現実には、インターネットというネットワークが活用されていなかった。そのような時点では「集合痴」以前の段階であり、インターネットは、そもそも無駄というか無用な存在であり、インターネット利用者たちは「鶏合の衆」に近かったかもしれない。

15年前の1998年4月に出版された岩谷宏の『インターネットの大錯誤』という本を見ると、「Webは、サーバ側がホームページと呼ばれるファイルを作成してディスク上に用意し、後は人びとがその所在を知ってくれて、アクセスしてくれるのを、ひたすら待つだけです」（岩谷1998, 94頁）とある。具体的に、捨てられていた子猫3匹の里親募集のメッセージをある出版社のホームページに約1か月掲載したが、そのホームページ自体へのアクセスがゼロだったという。ある種のニーズを持った人びとの出会いが期待されたのに、実際にはそれが起きなかったわけである。岩谷は、「World Wide Webおよびホームページは、企業や個人のこういった最も切実な通信ニーズに関して完全に無能です」（岩谷同書, 95頁）と述べている。

#### ②「炎上」現象等

メディア評論家の荻上チキは、その著書『ウェブ炎上』で「サイバースケード (cyber

cascade)」という概念を紹介している。これは、もともとはアメリカの憲法学者キャス・サンスティーンが提唱した概念で「サイバースペースにおいて各人が欲望のままに情報を獲得し、議論や対話を行っていった結果、特定の——たいていは極端な——言説パターン、行動パターンに集団として流れていく現象」（荻上2007年, 34-35頁）を指すという。これ自体は、「その現れ方によって時にポジティブに捉えられることもあれば、炎上などのようにネガティブに捉えられることもあります」（荻上同書, 36頁）としており、具体的な事例として、弁護士小倉秀夫の命名である「コメントスクラム」に関連したものを挙げている（荻上同書, 40頁）。それは『「コメントがスクラムを組んで押し寄せる」ケースとしては、掲示板などで人生相談や恋愛相談、闘病生活などを実況する書き込みに対し応援メッセージが大量に寄せられる場合もあれば、逆に特定の対象へのバッシングが多く寄せられて炎上する場合があります」（同）という。

荻上は、この後（著書の二章で）、サイバースケードのメカニズムについて独自の分析を展開しているが、分析の基礎を成すとしている既存の理論を誤解しており、信頼できないので、ここでは取り上げない。

「コメントスクラム」のような「サイバースケード」は、大衆による過剰なクレイジーな現象であるが、以前から「チェーンメール」による応援メッセージの過剰といった現象はあった。

#### ③中川によるネット・ユーザーの全否定

中川淳一郎は、自らの経験から、ネット・ユーザーは、結局は「バカと暇人」が跋扈する場であると結論づけ（中川2009年&2010年）、多くの有識者が述べる「理想論」を否定する。中

川が挙げる、さまざまな実例を見ると、確かに中川の主張もわからないではない。自分に全く関わりのないような問題に首を突っ込み、「正義漢」ぶってクレームをつけたり、炎上しそうなブログやツイッターを面白がって、さらに油を注ぐような書き込みをするネット・ユーザーは確かに多いであろう。

しかしながら、現状が酷いからと言って、それだけの理由ですべてを否定はできない。中川の主張に対する「反例」を挙げることはいくつでもできるであろうし、「理想」を述べているものがすべて「机上の空論」とも言えまい。例えば、ブログやツイッターの利用について、日本では確かに芸能人による書き込みに対する関心が高く、言わば芸能雑誌やスクandal紙誌と同じような機能を果たしている面は大きい。他方で、あまり目立たないが、真面目な意図や目的で書かれている「啓蒙的」なブログも少なくない（もちろん、それらも玉石混交であろうし、価値評価するリテラシーが必要であろう）。

通例悪く言われることの多い「2ちゃんねる」でさえ、場合によっては、プラスの集団行動をもたらすことは『電車男』の例だけでない。ある大学生のいたずらにより焼失してしまった広島平和記念公園の折り鶴を2ちゃんねるユーザー多数の協力で復活させたという例もある（荷宮2003、2章）。

#### 4 ネットワークの集合的側面

ナン・リンによる諸研究のまとめによれば、社会関係資本の代表的な研究者であるコールマンは、「閉鎖的なネットワークが社会関係資本に固有の利点を生み出すと考えている。それは、閉鎖的なネットワークが信頼、規範、権威、制裁などを維持、増幅するからである」（ナン・リン2008年、35頁）という。ところが、リン自身

はそうは考えておらず、従来のネットワーク論からすれば当然であるが、「ブリッジや構造的隙間、弱い紐帯の重要性」（同）を指摘し、「緊密なあるいは閉鎖的ネットワークを指向する背後には、特定の物事への関心が存在して」（同）おり、「すでに資源を手に行っている特権階級にとっては、資源の維持、再生産ができる閉鎖的ネットワークをもつことが重要である」（同）とする。この辺りは、「フェイスブック」が出現した当初の、ハーバード大学のようなエリート大学内の機能を考えれば納得できる。

結局、リンは、「閉鎖的ネットワークか開放的ネットワークのどちらか一方の重要性を主張するよりも、(1)緊密なネットワーク、あるいは開放的なネットワークがよりよい利益をもたらす状況はどのようなもので、その結果はいかなるものかを概念化すること、(2)実証研究のために演繹的な仮説を導くこと（<例は省略>）のほうが理論上はるかに重要である」（リン同書、35-36頁）と結論づけているが、このことは「集合知」と「集合痴」のどちらがより出現するかを考察する場合に、あたりまえ過ぎて特に参考になるわけではない（当然、考察する範囲に入る）が、決定的な重要性はあるだろう。

これに関連して、西垣通による、そのものズバリの『集合知とは何か』という著書について、少しコメントしておく。この本を通読した印象では、むしろ、そのタイトルとは異なり、これは「集合知とは何か」という問題を正面から扱っているとは言えないのではないかと、ということである。「集合知」というテーマを単なる集団や組織の問題に言い換えているし、西垣にとって都合のよい論点にすり替えて、自分の「土俵」で（ただし、他人の「まわし」＝ツールを使って）相撲をとっている、という印象がする。

特に、西垣は、個としての「人間」を完全にクローズドな性質なものとして論を展開してい

るのであるが、それはおかしいのではないか。人間は、クローズドな独立な存在（身体性）であると同時に、オープンな存在（社会性）でもある。つまり、人間は、両義的な存在であり、矛盾した存在である。それを完全に機械に置き換えて考察することは無理があるであろう。そうではなくて、「集合知」を言う場合には、インターネットの話であるから、やはり「ネットワーク」の集合的側面の考察が必要であろう。

## 5 結語

「集合知」は、単に、人びとが集まって情報を持ち寄ったり議論すれば、そこに自動的に「知」が生じるかと言えば、そうでもないようである。つまり、この考え方は、限定的にしかあてはまらず、それが成立する条件を見出すことが重要になる。

「集合痴」の議論の方は、あまりに否定的であり、ネットのような新たなメディアに対して後ろ向きである。このような議論は、特に日本では、新たなメディアが台頭するにつれて繰り返されてきたものと同種である。しかし、ニュー・メディアも時間がたてば存在があたりまえとなり、多くの人びとがそれを「活用」し、定着していくものである。

日本における、このような否定的な議論を読むと、基本的には「大衆」や「庶民」に対する「不信」あるいは「民主主義」に対する「懐疑」がその根本にあるのかもしれないと思える。

結論としては、常識的ながら、その利便性を生かし、マイナスを修正する方向をやはり考えるべきではないだろうか。

ただし、今回の小論は、現象面で目立った議論や著書を取り上げて、多少の考察を行っただけであり、より深い検討には至っていない。その点では、西垣のような（方向が正しいかどうか

かは疑問ではあるが）、人間の「知」に関する原理的な点に戻って検討することが必要ではある。特に、「集合知」は、ネット上の「公共圏」と関連が強いと思われるが、日本でそのようなものが本当に成り立つか、時間をかけて検討する必要があるだろう。

### <文献> (参照順)

- 中川淳一郎『ウェブを炎上させるイタい人たち——面妖なネット原理主義者の「いなし方」』宝島社、2010年  
市川真人『茶川賞はなぜ村上春樹に与えられなかったか』幻冬舎新書、幻冬舎、2010年  
クラシックジャーナル編集部編『おとなの楽習 偉人伝 クラシックの偉人伝』自由国民社、2011年  
アンドリュー・リー『ウィキペディア・レボリューション 世界最大の百科事典はいかにして生まれたか』ハヤカワ新書juice、早川書房、2009年  
稲田修一『ビッグデータがビジネスを変える』アスキー新書、アスキー・メディアワークス、2012年  
森 健『ビッグデータ社会の希望と憂鬱』河出文庫、河出書房新社、2012年  
岩谷 宏『インターネットの大錯誤』ちくま新書、筑摩書房、1998年  
荻上チキ『ウェブ炎上—ネット群衆の暴走と可能性』ちくま新書、筑摩書房、2007年  
中川淳一郎『ウェブはバカと暇人のもの 現場からのネット敗北宣言』光文社新書、光文社、2009年  
荷宮和子『声に出して読めないネット掲示板』中公新書ラフレ、中央公論新社、2003年  
ナン・リン『ソーシャル・キャピタル 社会構造と行為の理論』筒井淳也他訳、ミネルヴァ書房、2008年〔原著：2001年〕  
西垣 通『集合知とは何か ネット時代の「知」のゆくえ』中公新書、中央公論新社、2013年

### <HP>

「三人寄れば文殊の知恵」:

<http://ja.wiktionary.org/w/index.php?title=三人寄れば文殊の知恵&oldid=453969>